

仏教を身近にする伝道誌

浄土真宗を弘める会

# 道標

どうひょう



特別号スペシャルインタビュー—— ヴィカース・スワルーパ

『スラムドッグ\$ミリオネア』の原作者が語る

## 現代に息づく インドの霊性

エッセイ「文明の窓から」

ワシントンからのダルマメッセージ 法話 光とは

仏教を科学する 「お盆の古層」

開法のひろば、お坊さんのつぶやき—編集後記

2012  
—夏—  
特別号

『スラムドッグ\$ミリオネア』の原作者が語る。

# 現代に息づく

# インドの霊性

「人生の中で最も偉大な教師は、あなた自身の人生そのものなのです」。



スラムドッグ\$ミリオネア  
(原題: Slumdog Millionaire)は、2008年のイギリス映画。インド人外交官のヴィカース・スワルーブの小説『ぼくと1ルピーの神様』(ランダムハウス講談社)をダニー・ボイルが映画化した。第33回トロント国際映画祭観客賞、第66回ゴールデングローブ賞作品賞(ドラマ部門)、第62回英国アカデミー賞作品賞受賞。第81回アカデミー賞では作品賞を含む8部門を受賞した。

©2008 Celador Films and Channel 4 Television Corporation

日本人にとってインドは仏教の発祥の地「心のふるさと」である。そして近年、経済発展著しい国と関心が高まっている。そんな中2009年、そのインドを描いた映画がアカデミー賞を取った。「スラムドッグ\$ミリオネア」である。なんとその原作者が日本におられる。それも大阪に！彼はインド総領事である。ご自身のエピソードそしてインドについて語っていただいた。

●総領事でいらっしゃるのと同時に作家でもあられるわけですが、そもそも作家活動を始められたきっかけは？

外交官と作家の両立が難しいと考える人は多いけれども、実はそうで

もないのですよ。そのことに関して、ひとつ面白い経験をしたことがあります。南アフリカにいたとき、ダーバンからヨハネスブルグまでの飛行機に乗りました。その時、隣の席の人と少し話をしたんです。南アフリカの白人で、どんな仕事をしているのかと尋ねたところ、プレトリアのアイコミッションで、ナンバー2の地位にいるという。その人が本を出して読み始めたんですが、よく見るとそれは私の書いたものでした。インドを舞台にした作品だったので、彼はインド人の私に「この本を読んだことがあるか？」と尋ねてきたんですね。それで、私は自分が書いた本だと答えたんです。ところが

隣の男性は私が冗談を言っているのだと思い、「外交官をしていてどうやって作家もできるんだ？」と言う。それで、最後のページを見れば私の名前と写真が載っていると答えた。最初は写真を見ても「似ていない」と言っていたが、最終的に、最終的に自分の名刺を見せたら信じたようで、興奮しながら「まさか自分の好きな本の作者が隣に座っているなんて。」と言っていました。このように、外交官と作家をまったく別物と考える人の方が多いんですね。ただ、私自身は、自分を作家として考えたことはあまりないし、子供の頃から作家になりたいと思っていたわけでもない。また、なれるとも思っていませんでした。作家になるきっかけとなったのは、2000年〜2003年までロンドンにいて、ロンドンというところは、やはり英語の出版の中心地ということでした。作家も多く、作家と出会う機会もありました。そのような環境に自分がいたから、自分も何か書いてみようと思っただけで、もしロンドンに赴任していなければ、何かを書こうと思わなかったでしょう。私自身は偶然作家になってしまったというような感じだと思います(笑)。

●あなたの小説『ぼくと1ルピーの神様』が映画化されて『スラムドッグ\$ミリオネア』になったわけですが、小説ではどういうことを伝えたかったのでしょうか？

この小説で最も伝えたかったこと

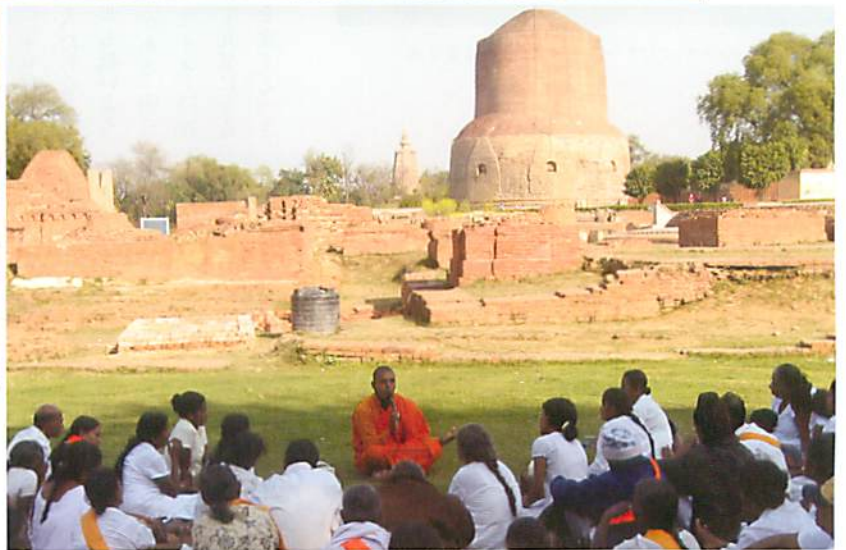
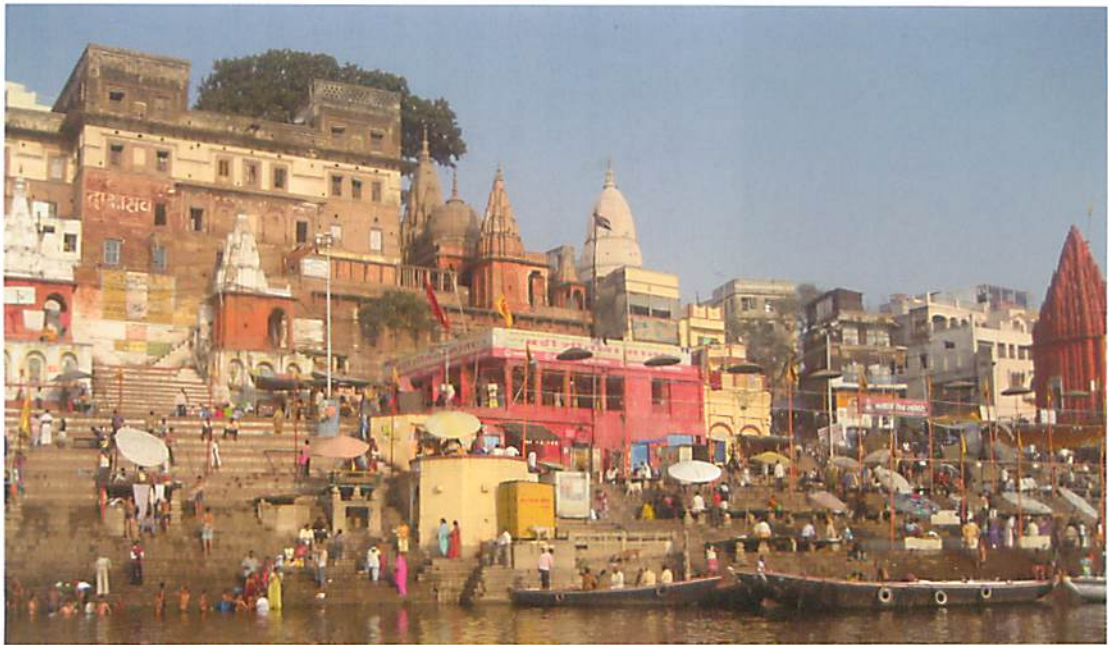
は、経済環境や置かれている状況で人を判断してはいけない、ということです。日本ではほとんどの人が基本的な教育を受けられるが、インドではメイトであったり、大学を出ていなかったり、新聞を読む力がなかったり、教育を受けていない人たちがたくさんいる。教育を受けていない人は学が無いので駄目だ、という意識が潜在的に人の中にあるが、正式な学問の教育を受けていない人でも、ちゃんとした知識や知恵を身につけることが出来るということを言いたかった。人生の中で最も良い先生は、自分の人生そのものだと私は思っている。学校ももちろん大事だが、生きる上での知識や知恵などは人生そのものから学ぶことが出来るということを伝えたかったのです。



●インドは経済的な格差があり、教育環境も違うわけですが、どのようにして人々は教えや宗教について学ぶことができるのでしょうか？

教えというものは、教育と直接結





がついているものではなく、一般的に広く世の中に広まっているものです。ギーター（聖典）の教えでは「善い事をしなさい」と言っています。それも、報

いがあるから善い事をするのではなく、善い事をすればその報いがやってくる、善い行いをすれば善い果を得ることができるといふ教えです。この教えは、教育を受けた人だけでなく、学校に行っていない道端でリキシャを引いているような人でも知っている。これは祖先から受け継いだ民衆の知識、知慧の一部になっている。何も特別なものでなく、インドの社会にとっての常識であり、日々の生きる指針となっている。よく知られているものとしては、今自分が貧しい身分にあるのは、前世の行いがよくなかったからだという考えがある。今良いことをすればきつと来世で自分は良い暮らしが出来る。だから今日を頑張っていこうという考えは、階級関係なく人々の中に今もありますね。

●インド人の中では来世とか前世があることを信じているということは普通の考え方なのでしょうか？

そうです。その考え方は哲学の一部ではなく、自分の親や祖父母などがそのことについて語り、何世代も何世代も受け継がれたものなのです。

●近年、欧米や日本の若者たちがインドを訪れ、そのダイナミックさ、そしてその精神性に触れ、人生のインスピレーションを得ています。インドでは階層によって教育の程度も違うようですが、インド全体に強い宗教性などが存在している理由とは何でしょうか？

最近では若い人たちがMTVのダンスを踊ったり、ショッピングモールへ買い物に行ったりという現象が起こっています。しかし、今でもインドでは一定の精神性や霊性が活きている。インドで見られる面白い現象として、若者が行くショッピングモールなどの中に、



「サードウ」と呼ばれる上半身裸で首飾りだけをしているような遊行者たちがいます。このサードウと言われる人々は、富や収入が無く、食べ物も人からもらっているような人々なのです。が、そのぶん世の中に対してのしがらみも無い。昔からのインドの教えの中で、「この世界はあくまでも幻想の世界である。」というものがあります。壁にぶつかったり怪我をした時には痛みを感じるの、実際は幻想ではないのですが、哲学的な意味で、お金や物には結局価値が無く、自分が死ぬときには結局全て手放すものだから、それを追い求めるよりも、この世で生きている内に善い行いをして、後



サルナート ムールガンダクティール寺院 壁画 野生司 香雪 画

に神様と繋がる。そういう考え方がインドにはある。ヒンドゥーの考え方の中に、人生は4つの段階に分かれている、というのがあります。最初の段階は「ブラフマチャリヤ」(学生期)と呼ばれ、学びの期間だと考えられています。2つ目は「ガールハステイヤ」(家住期)と呼ばれ、結婚という意味で訳されることも多いのですが、世の中の出来事を理解し、働いて財産や富や家族を養う期間だと考えられています。3つ目は「ヴァーナブラスタ」(林住期)と呼ばれ、林に隠棲して聖典を学ぶ修行することだと考えられている。最後の段階は「サンニャーサ」(遊行期)と呼ばれ、それまで築いてきた富や財産や家族を全て捨てこの世間から離れ一人になり、真の生きの意味を考え、これからの旅立ち(死)に向けて準備をする期間だと考えられています。

●インドへ旅行した際、インドの人々は子供も大人もみんな明るく積極的だという印象を受けました。それはインドの家族、親子の関係が良好だからではないかと思うのですが…？

インドの家族のつながりがすごく密ということも理由にあるかもしれませんが、インドの人たちは気質がすごく楽天的ですね。自分の将来に対する希望をどれほど持っているかという世界的な調査があるのですが、インドはいつもトップのほうに出てくる。すごく貧しい国で、食事も着るものも住むところも無くても、明日は今日よりもずっと良い日になるだろうという希望を持っている人たちがたくさん。通帳に貯金が1ドルも無いような人でもハッピーで笑顔がある。明日への希望を常に持っている。インドに旅行に来た人はそれを見て元気になるだろうし、人生の見方を変えるべき

だと思おうでしょう。もう一度来なくなるのも、それが理由かもしれない。

●近年、インドは経済発展が著しいですね。日本では経済発展により著しく伝統文化が失われたと見る向きもありますが、インドの伝統文化や宗教性は今後どうなっていくとお考えですか？

近代化による生活の変化というのは、常にどの国にもあることですね。インドでも同じで、若い人と親の世代の人たちの違いが出てきてしまっているのは仕方ないことでしょう。しかし、それにもかかわらず、インドが今でも宗教的な国であることに変わりはありません。若い人たちも信仰を持ち、ほとんどの人が神様を信じ、お寺へ参拝しに行くという習慣がある。だから、私は近代化によって人々の宗教観が崩れたり、宗教を捨ててしまうということはないと考えています。

●今年の日印国交樹立60年にあたります。日本にとってインドは「仏教のふるさと」でもあるわけですが、外交官としてのお立場から、今後のインドと日本との交流はどうかあるべきかをお聞かせください。

インドと日本の関係は、将来も非常に明るいと考えています。両国には、共通している部分が多すぎます。代表的なもので言えば民主主義です。また、歴史的に見ても両国の間には政治的な問題が無い。歴史的に言えば、戦後初めて日本に手を差し伸



### ヴィカース・スワルーブ

在大阪・神戸インド総領事  
1986年にインド外務省に入省。これまでアンカラ、ワシントンDC、ロンドンで数々の要職を歴任し、2009年8月から在大阪・神戸インド総領事に着任。ニューデリーの外務省では、アフリカ南部、米国、パキスタン、ネパール、ブータンを担当。外交官であると共に、スワルーブ氏は作家でもある。これまでQ&A (邦題:はくと1ルビーの神様)、シックスサスペクツの2冊の小説を出版。Q&Aは「スラムドッグ・ミリオネア」として映画化され、日本語を含む、世界40以上の言語に翻訳されている。アバルナ夫人は画家であり、2人の息子がいる。趣味は、読書、音楽鑑賞、クリケット、テニス、卓球である。

べたのはインドだという関係もあるし、パール判事が極東軍事裁判で下した判決の例もある。ネルー首相が象を上野動物園に寄贈したこともありすね。そういう意味で、インドの側からの日本に対する好感度は非常に高い。現在では、インドは日本からインフラ開発の支援を受けています。デリーに大きなメトロの線路があるので、それは日本の支援のお陰でできたようなものです。ただ、1950年ぐらいから両国のお互いに対しての受容性というものが少し低くなってきてしまっていた。日本はアメリカを見ていたし、インドはアメリカの同盟国では無かったので日本との関係が希薄になっていた。お互いが近づいてきたのは1990年代ぐらいですね。この5年ぐらいの間でインドにある日本の企業の数というものが、1000社近くにもなりましたが、70年代ぐらいから密接な関係があるタイや中国に比べると遅れをとっている。しかし、関係が強まっているのは事実です。近年特に経済でのお互いの関係が非常に強まりを見せている。

日本にとってインドは、アジア諸国の中で一番のパートナーだと思っています。インド以上のパートナーは見つけないのは困難だと思っているし、今後10年から15年の間に両国の関係はますます強くなっていくでしょう。

もちろん、仏教が両国の関係の中で果たしている役割は、とても大きいものがある。6世紀に仏教が日本に伝わってきて、736年、インド人僧ボディセーナが来日し、東大寺の大仏開眼供養会の導師をつとめました。両国の文化的なつながりは、そこから始まったと思うのです。また、日本のどこでも見られるのが、ヒンドゥー教の神様のガネーシヤ、サラスヴァティ、シヴァ、インドラなどです。これらの神々は現在、日本の神様と呼ばれ、日本に根付いている。こうした例を見ても、今後の両国の関係というのは、人と人との人的交流というのが大切な基盤になっていくと思えますね。

# 文明の窓から

## イ

ンドの空は青く高く大きい。インドを巡った十日間、どこへ行ってもその空に変わりはなかった。都会のデリーやカルカッタでも、ヒンズー教の聖地ベナレスの町でも、ネパールへの田舎道の村々や広大な農地でも、釈尊の正覚の地プッタガヤでも同じだった。それは雄大な自然の、赤い大地の空であった。文明に飼われられた私たち日本人の、また暖かく甘やかしてくれられた私たちのそれとは違っていた。人間の個人的な小さな心情などと全く無縁の様にインドの青い空は遥かに広がっていた。

最近、とくに世界の若者達が、ヨーロッパやアメリカから、日本からこの地を訪れるものが少なくないのは、決して単なる東洋的異国趣味や流行の仏教主義ではないだろう。またヒッピーたちがこの地に巡りくるのも、決して単に現代文明からの逃避だけでも、甘く悲しいシタールの旋律のせいだけでもないだろう。現代に生きる者の心を奪う何がインドに在るのだろうか。

憧れに似た想いを抱いてこの地に旅した十日間。だが地図を見れば、デリーからカルカッタまでを中心としたほんの僅かの地。三時間の小さな飛行機も、ネパールへの終日のバスも、夜行列車も、地図の上での距離は余りにも小さい。実際にインドの地は大きいのである。遙かなる大地だ。

実際に碧い空の下、赤い色の大地は印象的だった。ニューデリーの広い街路に舗装がしていても、古い街路樹や公園の樹々が緑色をしていても、高級住宅の芝生が広く色とりどりの花が咲いていても、綺麗なサリールが力車や自動車に乗っていても、それでも赤土の大地が心に浸みるのである。



数々の壮大な遺跡や寺院の建造物は尚更だ。デリーで巡った、イスラム的・インドの様式の十六世紀の広大なフームン廟、高さ七十一メートルもあるクットゥブ・ミナールの塔、赤い城といわれる豪華な城壁、あるいは表面のトルコ青が剥げ落ちて残骸を公園にさらしたロディ王朝時代のいくつもの廟、それらかつての過去の栄光の影は全てが赤いレンガ、大地と同じだ。やがてこれらの歴史も大地に帰るのだろうか。サルナートやナーランダの発掘された壮大な仏跡地、碧い空の下の廃墟の赤土は鮮烈だ。インド最大というベルシア様式の回教寺院をはじめこのデリー中心に美しい大理石の建造物があっても、奇麗なサリールや装身具と同じくこの赤い大地に蔽われてしまうのである。

そしてこの広い大地に、驚くほどの人間の数。街の舗道に寝そべり、座り込んだ浮浪者同様の汚れた人たち。土埃にまみれた乞食同様の子どもたち。そして溢れるほどの怖るべき雑踏。おびただしい裸足の数。貧しさと汚れと埃。一坪ほどの店が暮めく家々。それは田舎の村へいつても、夜になつても同じだ。ホテルや一部に灯りは見えてもほとんどが電灯もなかった。ネオンがあつたのはパト

ナの町だけ。それでもアセチレンガスの暗い店の灯りに黒い人間が群がっている。インドの人口は六億という。しかも工場労働者の出現によつて崩れはじめたといつてもまだ残っている身分制

度。極端な貧富の差。だが、身分制度にさえ入れない民が今なお六千万人だとか。

ヒンズー教徒にとつて聖なる牛や、回教徒が手を下さない豚は、都会の車道舗道を問わず悠然と歩く。蠅が葉子に真つ黒にたかつても払わない。男や子供たちは舗道にしゃがんで車道に向い、処かまわず小便はする。終日バスに揺られたネパールへの旅で便所のあつたのは税関の一軒だけ。田舎へでは歩くのは人間だけではない。象、馬、ロバ、水牛、羊、山羊、猿……。

彼等は、赤い大地に動物たちの眼の高さと同じところで生きるのである。文明という地点から見ても不潔で不衛生だが、彼等にとつて生きるのは赤い大地なのだ。この猥雑さを人は日本の終戦当時の闇市に似ているというが、彼等に失われたも

のではないのである。土埃にまみれながら大地に這つて平坦と、貧と病と死の苦のなかに……。

それは赤い大地の静かなるエネルギーそのものにちがいない。インドの碧い空の偉大なる大地には、自然と文明、古代と現代とが混然と共存しているのである。この赤い大地の静かなるエネルギーを前にして私は、次第に自分が小さくなるのを感じはじめ

（昭和五十二年三月）

## 津山 玄昌師

(1925年—1992年)

浄土真宗本願寺派願稱寺前住職、現代美術評論家

### 主な著書

時代の痕跡(桂書房2002年)時代の眼差し(桂書房1987年)等 その他エッセイ、コラム多数

映画、テレビ化された「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」の原作は 医師、井村和清(1947年・1979年)の手記が津山師らによって書籍化されたものである。井村氏は甥にあたる。



# Darma 法 Message 話

ワシントンからのダルマメッセージ

from Washington D.C.

## 『光とは』

### 光

とは不思議なものだ。目の前にあっても私たちは、それを意識しない。

たとえば日中、私達が戸外に立って周りを眺めても光の実体は見えない。かと言って、そこに光がないとはいえない。光は、見えないけれども私達の周りに充滿し、私たちはその見えない光を通して、木や花や家や人を見、そのことによって光の存在を知る。

光は、こうした「外界」の光と、もうひとつ、「内界（人間の内部）」の光という、ふたつの概念で捉えることができる。

内界の光とは何かといえば、例えば、智慧の光とかサトリの境涯を表現する真理の光などだ。それは想念がつくり出した賢気楼ではなく、仏の教えによって内奥に感じられる意識性の光である。そして、この光こそが仏身なのである。仏身とは真理のあらわれである。そして外界、内界を問わず、これら見えざる光をアミダの智慧の光明として拝することが浄土真宗の教えである。讃阿弥陀仏偈和讃に「無明の闇を破するゆえ智慧光仏となすけたり。」とあるの

は、親鸞聖人が内界の光を実感したことの証しといえるだろう。聖人はその光について、「不可思議光」とか「解脱の光輪さわかもなし」とも述べていらつしやる。つまり、アミダの光明が絶対界の光であるということだ。

その絶対界の智慧の光明と、相対界に住む私達二個人との関係は非連続の間柄である。では、その非連続の間柄をどうして超えていくのか——。浄土真宗では、私達二個人が不可思議光に「ナモ」（またはナム）することによって、非連続の間柄を超えてゆく。「ナモ」とは不可思議光の仏身、アミダに対する徹底的な自己放棄とアミダの願いへの全面的信頼を意味する。そして、それを身を以て実践するのが真宗信徒のあり方なのだ。

アミダはボダイサツヴァ（菩薩）の位にあった時、その人間の切望に答えることを誓い、世界の終焉において取り残された最後の一人まで救わねば止まないという強い願を打ちたてた。この願いこそが、慈悲であり、その廣大無辺の慈悲を全面的に信頼することが「ナモ」である。

つまり、「ナモ」とは、不可思議光仏身に自己のすべてをゆつたりとゆだねることだ。あくまでもゆつたりと自然に、努力しないで自己をゆだねるのである。ゆだねるのはあなたの意識であって心ではない。心はテクニックを使いすぎるが意識にはそれが無い。

かくて、絶対界の不可思議光としてのアミダ仏自己自身が非連続の連続として結びつくのである。

結びついてどうなるのか——。そこには、新しい命が生まれる。そして、その新しい命をエンジョイしよう。その方向を指し示するもの。それこそが浄土真宗である。

### 本田 正静師

1929年ハワイ生まれ  
大阪で育つ 龍谷大学卒(仏教学)  
1954年開教使として渡米。  
1961年から91年までワシントンDC、アメリカ議会図書館アジア部日本課に勤務。  
2000年から09年まで浄土真宗本願寺派ワシントンD.C.恵光寺に非駐在臨時布教使として勤務。



# お盆の古層

仏教を科学する

五十年ほど前、イランの洞窟で二十八体の「ネアンデルタール人の化石」が発見されました。そして、そこには人間の化石と共に、数種類の植物の化石も見つかりました。調査の結果、ここは約六万年前の墓地であり、植物は死者に供えられたお花だったのではないかと言われています。

ネアンデルタール人は私たち現生人類の祖先ではありませんが、同じ

語りに耳を澄ませてきました。そんな中、特に重要視されてきたのが、「太陽の力が最も大きくなる時期」と「太陽の力が最も弱くなる時期」。すなわち夏至と冬至です。この時期は、見えない世界との距離が接近して、死者の往来が盛んになるとされます。そこで宗教儀礼を営み、死者と交流すること、見える世界のリズムを保っていました。

死者を迎える宗教儀礼が行われていました。現在では、冬至の習俗はあまり残っていないようです。ただ、お正月がその変形であると考えられる研究者もいます。正月にお墓参りする習慣をもつ地域があるのは、そのためだというわけです。

「帰る世界」をイメージしてきました。そこに「大きな生命の流れ」や「無条件の受容」を実感していたのです。それは、「おかえり」と言ってもらえる世界、「ただいま」と帰っていく世界であり、人類の精神の古層に脈々と息づいている宗教性です。

「自然の動きに反応して亡き先人を祀る宗教形態」や「ただいま、おかえりの呼応」は世界中どの文化圏でも見ることが出来ます。それは人類にとって、とても大切なものでしょう。

しかし、それだけでは仏教者として仏道を歩むことにはなりません。仏教の教えに導かれて、それまでの自分が大きく転換するという方向性がなければ、仏道は成り立たないのです。

ヒトです。人類だけがある時から「死というもの」を意識し始め、死者を悼み、祀るようになったのです。

現在でも世界各地で、夏至や冬至の時期に死者を迎える儀礼が行われています。有名なところでは、ヨーロッパのハロウィンがあります。

「盂蘭盆会（お盆）」と融合したためです。

## 死者との交流

死や死者を意識することこそ、人類であるあかしです。

ハロウィンはちょうど冬至の時期に行われます。中国では夏至の頃に開鬼門と呼び、死者の世界の門が開くと考えます。

死者がやってくる世界は、やがて私たちが行く世界でもあります。

## 心原風景

死者がやってくる世界は、やがて私たちが行く世界でもあります。古代から人間は、西へ沈む太陽に

人類は死者と共に暮らし、死者の

日本でも古代では夏至と冬至に

古代から人間は、西へ沈む太陽に

ます。

しやくてつしやう  
釈徹宗師  
1961年・生まれ  
浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部教授、特定非営利活動法人リライフ代表。専攻は宗教思想・人間学。  
主な著書  
『親鸞の思想構造』(法蔵館、2002年)『現代霊性論』(内田樹との共著・講談社、2010年)等 著作多数



近年葬儀会場が増えることも自宅での葬儀を挙げる事がめっきり少なくなりました。これから暑くなりますが、重厚な袈裟を付けて、白い幕で閉じられた部屋での読経は蒸し暑くて大変でした。外の天気を気にせず快適な温度調整の許お勤め出来る葬儀会館は大変有難い。ある会場では衆会(仏教讃歌)がBGMとして流されていて感心したものです。

さて、珍しく自宅での葬儀がありました。名号と供花のみのお飾りで、納棺と出棺は葬儀社に依頼されま

した。家族葬と言ったことでしたがお孫さまや町内の方も弔問され、沢山の人の見送られての出棺でした。今回は仏間があり改築間もないお宅でしたので特に飾りは無くても質素ながら厳かに勤まりました。なれない事を切り盛りするのは大変です。無難に熟そうとすると雑務が増えます。しかし法事に関しては、皆さまと心をつなげて手を合わせる。この気持ちさえあれば乗り切れると再認識しました。

ある僧侶(京都市)

昨年末フランスへ行きルーブル美術館を訪問した。絵画ももちろんだが、たくさんギリシア彫刻が展示されており堪能できた。ギリシア彫刻の題材の多くはギリシア神話の神々だ。その神々は皆人間の姿をしているが、エロティックなまでに美しい身体をしている。神々と人間には、近寄りたがたい隔たりがあるのだが、それが人間離れした美しさで表現されている。ギリシア人は、このような完璧な美を神々と分かちあうことで救われていたのだろう。このようなギリシア彫刻を見るときにいつも思い出

すのが日本の仏像だ。仏像の多くにおいて、てぶぶりとした体軀に、大きな耳、切れ長の目、みずかきの手、た掌など、どちらかといえは美しいというより少々怪異な特徴によって仏の偉大さが表現されている。仏教は仏の慈愛を、身体美の完璧さでもってではなく、慈悲の意にみちた誇張された形姿で表現している。仏教もギリシア神話も多くの尊格が登場し多神教的であるが、それぞれの救いあり方の違いが尊像に現れることは興味深い。

僧侶 大阪府在住ヴァールハイト

「読者の皆さまからの投稿をお待ちしています。編集室まで」

### 編集後記

今、自坊に残ってあった「道標」第二号を眺めている。刊行されたのは昭和三十一年四月一日と書いてある。体裁、活字も今と同じだが、紙はわら半紙である。表紙は「お釈迦様の首から上の像」の写真である。今回、初めての特別号。実は当初、軽い見直しのつもりであったが、読者、専門家を含めいろいろな方々の意見を聞いてみるうちに又、実際に動いているうちに、こういう形になった。なつてしまったというのが正しいのであろう。特別号ということも思いつくまま記事内容を決め、駄目で元々というノリで執筆者にお願ひしてみた。幸いにも皆さん快く引き受けて下さり実現の運びとなった。(感謝！)

さてインド総領事インタビュの中、日印国交樹立六十年ということ初めて聞いた。六十年前といえは昭和二十七年、そういえば今年にはサンフランシスコ講和条約発効の年である。私も昭和二十七年生まれ、還暦ということになる。

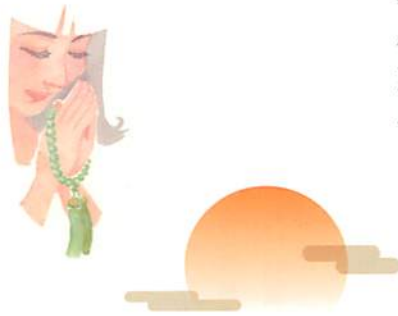
日本の再生、復興。「道標」第一号はそんな世間の空気の中、産まれたのである。今回の特別号、「道標」という書体も当初のものを採用した。たとえ偶然であったとしても「初心に還れ！」ということであろう。そんな声がどこからか聞こえてきたようである。

平成24年7月 編集室 石田克彦

四天王寺さんは今から約1400年前に、聖徳太子が建立した日本仏教最初の官寺であります。

石の鳥居は、日本最古の鳥居の一つで、国の重要文化財です。

その四天王寺さんでは、春分の日・秋分の日、日想観(にっそうかん)法要が執り行われます。



日想観とは、夕日(たそがれ)がまさに沈もうとしているありさまを見ることによって、阿彌陀如来の浄土を想念する観法です。

まさに沈もうとしている夕日(たそがれ)が、四天王寺境内の西大門(極楽門)と石の鳥居と夕日(たそがれ)が一直線に結ばれ参詣者らは、西方浄土(極楽浄土)を想念し、真西に沈む夕日に手を合わせます。

私たちが阿彌陀如来の浄土を想念し、沈む夕日に手を合わせてみませんか?

〒543-0062 大阪府大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12 四天王寺西門交差点 西へ30m  
タウンページ <http://nttbj.itp.ne.jp/O667717007/> (詳細地図あり)

☎ 0120-817065 ☎ 06-6771-7007

株式会社 廣瀬佛壇店